

沼津市若山牧水記念館

第32号

2004.3.10

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/

若山牧水の歌集

第一歌集『海の聲』



われ歌をうたへりけふも故わかぬかなしみどもにうち追はれつつ

を冒頭に置き、最終に次の歌を配する。

恋人よわれらはさびし青ぞらのもとに涯なう野の燃ゆるさま

奥付に明治四十一年七月十八日発行とある。早稲田を卒業したのは七月五日。編集終了は四月二十日。卒業試験とぶつかり多忙な時期であったが、園田小枝子との恋愛はまさに進行中で、編集を終えた五日後には百草園に二人で泊っている。後年、牧水自身が『海の聲』出版當時「増進会出版社『若山牧水全集』第九巻所収」に書くところによると、グレさんと

呼ばれた人がある日ひよつこり訪ねて来て、「出版業を始めるが、先生の歌の本を出させて頂きたい」といい、初めて先生と呼ばれて嬉しくなり、その気になって、主に『新声』に発表した歌をまとめた。表紙は新進の画家平福百穂に頼んだ。「どうして氏に頼む様になつたのだつたか、はつきり思ひ出せないが、恐らく同氏の絵が好きで、突然訪ねて行つたものだったらうとおもふ」と回顧している。

ところが、この出版は思わぬ齟齬に見舞われることになる。出版を引き受けた「グレさん」こと文潮社が資金難で手を引いてしまい、発行費が牧水の負担になってしまった。牧水は牛込原町二丁目の下宿を発行所とし、友人たちに借りまくり、師の尾上柴舟にも二十円借りて、何とか出版をしたのである。今にいう自費出版になってしまった。その後、牧水は小枝子と結婚するつもりで借りた家に婆やを雇い移り住んだ。しかし、人妻であることを隠している小枝子が受け入れる筈はなく、ここから牧水の苦悩が始まるのだ。

『海の聲』はこうして誕生した。尾上柴舟に「君によりてまたかへりふむわかき道花はきのふの紅にして」の讃歌を含む序文をいただき、明治三十九年の春ごろから四十一年春までの四百七十五首を所収。表紙は平福百穂、題字は土岐湖友(善鷹)の筆が金箔で押されている立派なものだった。定価五十銭、七百部印刷というが、売れたのはほんの僅か。牧水は売れ残った『海の聲』を一冊八銭で古本屋に売ってしまい、婆やに「なんぼなんでもそれでは余りにひどい」と泣かれたとか。惨憺たる出発ではあった。

しかし、『海の聲』所収の「幾山河…」「白鳥は…」「山を見よ…」などの作品の大半が、出世歌集となつた第三歌集『別離』に収められるなど、この歌集の価値は高かった。(須永秀生)

牧水の書について

成田 真洞しんどう

「コロコロとこるがる小芋こいものような…」とは、書家の榊莫山さかきぼくざんが十年程前に『書百話』の中で、

牧水の書を評して言った言葉である。前後の文章は忘れてしまっても、何故かこの部分だけは記憶に残っている。牧水の書の外形から受ける印象を端的に言い得て妙であったからであろう。

牧水の書が書家の中で論じられることは少ない。しかし、文人墨客としての能書の中には必ずと言っていいほど取り上げられる。

そして、当然のことながら、牧水を愛する人々には牧水の書のファンは多い。沼津市若山牧水記念館館報第一五号の上田治史氏の「一見して闊達な筆はこびとか繊細柔軟な筆触など、言葉に尽くせない風情が感じられた。文字が表す、見る者を酔わせるようなエモーショナルな表情は、やはり牧水ならではのものだ…」の評や、同第一七号の須永秀生氏の「しら鳥はかなしからずや…」の色紙に対する感想などである。他にも、歌人大坂泰氏は書道の専門誌である『墨』第一五〇号の特集「人と書を味わう―若山牧水」で、「牧水の書のあのまろみのある筆跡を眺めていると、安らいだ気持ちになってくる。それは歌と書が、牧水を軸にまさに渾然とした一体

感を醸し出しているためだと思う。」と牧水の書の特質を的確に述べている。

昨年開催された第一回沼津文学祭で、シンポジウムのパネラーの一人として大いに好評を博した歌人伊藤一彦氏も、同誌に大変素晴らしい一文を寄せている。ここにその一部を是非紹介したいと思う。

「牧水は多くの書を残している。それらの書は歌と同じように親しまれている。まずは読みや

すいということがある。草書体のくずした字を

使わず、変体がなもとど使わず、続け字でないためである。書の門外漢の私のような者にもすぐに読める。もちろん、ただ読めるだけでは魅力はないのであって、丸みを帯びたやわらかな書風が調べもよく内容も人間性あふれた作品にびつたりなのである。――(中略)――経済的理由から始まった書であるが、書そのものはあくまで牧水らしい深い味わいを持っている。牧水と啄木の短歌は表現が平明な点で明治四十年代に画期的だった。そして、牧水はその作風を維持する。歌も書も悪しき意味でプロ化しないところが牧水らしさだった。専門の歌人や書家にむけて牧水は仕事したのではなかった。この世

幾山河こえさりゆかば
はてなふ国ぞけふも
ぬくぬく

幾山河こえさりゆかば
はてなふ国ぞけふも
ぬくぬく

に生を享けた一人の人間としての「へあくがれ」をあくまで自分流でこつこつと、それも気負わず自然体で表現したところに牧水の大きな意義がある。」

牧水の書については、大悟法利雄氏の編著になる『若山牧水の書』（清水弘文堂）にかなり詳しく述べられているが、それを除けば、これほど解りやすく、肝要な点を余すところ無く述べている文章を他に知らない。

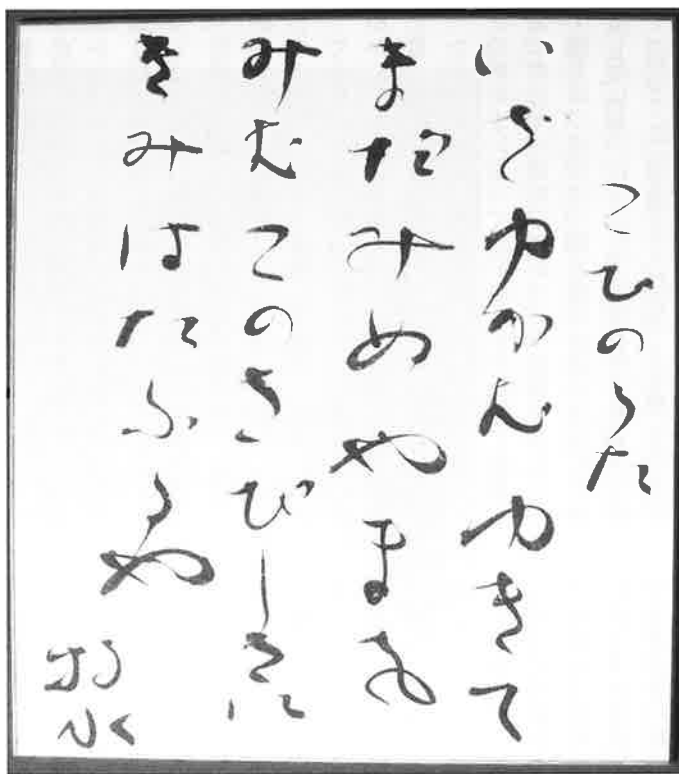
一般に牧水の書と言えば、まず条幅に書いた「幾山河こえさりゆかば…」を思い浮かべるくらい、この作品は代表作として誰もが一度ならず目にしている書であろう。現在、学校教育の中で、高校芸術科書道では「漢字仮名交じりの書」の学習が重要視されている。教科書にもその好例として漱石や子規、茂吉や光太郎、會津八一などと共に掲載されている。

それらの本などに紹介されている牧水の「幾山河…」の条幅作品には二通りある。

一つは、例えば、『漢字仮名交じりの書』（古谷稔編著、雄山閣）などに所載のもの、もう一つは沼津牧水会所蔵のものである。前者（前頁の写真右）は、条幅の字としては小振りで、書線も比較的細くスッキリしており、白の空間も多いので上品な感じだ。それに比べて後者（前頁の写真左）は、実物を見せていただいたが、ふっくらとした文字にふくよかな情感があり、絹本とやわらかな墨色がよく合い、運筆のリズ

ムもゆったり感じられるものである。いずれも、牧水らしく作意に凝らない自然な書きぶりで、漢字と仮名の調和がよくとれたそれぞれに良さがある作品である。

たしかに、この「幾山河…」の書は、牧水の代表作としての格を備えたものであることは間違いない。しかし、私が、数多くの牧水の書の中から、その妙味を味わうべき作として、あえて第一に推すのは「いざゆかむゆきてまだみぬやまをみむこのさびしさにきみはたふるや」の



色紙である。残念ながら実物は見ていないのだが、複製でこれだけのものだから、実物もつとよいものであることは明らかだ。この色紙を沼津市若山牧水記念館の売店で見たととき、直感的に「すごい！」と思った。今まで観念的に見ていた、例えば「コロコロと小芋を…」という見方が一掃され、まったく新しい認識が生まれた。そこには正統な書法が見られたからだ。何が「すごい」のか、第一に、書作の経験をもつ人なら誰でもわかると思うが、仮名だけで

（ということは、漢字や変体仮名を一字も入れずに）詩や短歌・俳句を書くことがいかに難しいかということ。それを堂々と正面から、何ら臆することもなくやってのけ、それが章法（全体のまとめかた）にかなって成功しているということだ。次に、「書きぶり」が実にみごとであること。それは、毛筆の特性である開・閉・捻のはたらきが要所所で活きており、筆圧の抑揚によって生ずる微妙な効果が、太い線や細かい線、頓挫する複雑

な線となつて、極めて明確に表現されているということだ。

図版を見て解るように、この作品の随所に見られる太い線は、あたかも豊満な婦人の柔らかい肉体のごとく温かく、細い線は、書法で言う「錐画沙」^{すいかくさ}、つまり、堅い地面に錐^{きり}を突き立てて引つ掻いてゆくような抵抗感のある深い線質となつて表れる。また、線の方向が転じたり、次の画に移つたときに見られる捻筆^{ねんびつ}、つまり筆の穂先がねじれる(例えば「ぎ」の一面目から二画目の縦画の頭におつつける時などに見られる)筆遣いは、強い逆入となつて作品全体を引き締めている。

この他にも、ひらがなの形のとりかたの妙や濁点の打ち方の多様さなど、注意深く見ていくと文章では表現できないような微妙な美点が沢山ある。

そして、最後に〈心眼〉をもつて作品全体を通しての流れ(リズム)を見てみると、字から字へ移つていくときの目には見えない連続の線(空筆)が、とても美しく見えてくるのだ。

さて、ここまでではこの作品についてやや分析的に見てきたが、実は、この色紙をじーっと見つめているうちに感じたことがある。普通は、書を鑑賞する場合、すでに書かれている筆跡に目をやるが、私はまず、何も書かれていない真っ白な状態を想定することから始めることにしている。それは、最初の文字の第一画目の落筆

の瞬間から書作のドラマが展開するからだ。この色紙の場合、全体の書きぶりからして「いざゆかむ」から「きみはたふるや」までの四行が

実にほぼ等間隔に見事に収まっていることに気づく。これ以上動かしようがないくらいだ。第一行目に「こひのうた」と題を書いているにもかかわらず、目がそこにかかない。試しに「こひのうた」の部分と最後の落款の「牧水」を覆つてみる。やはり間違いはない。牧水は「いざゆかむ」から書き始めたのだ。落款は当然最後に書くので、後ろの広々と空いている余白にゆつたりと入れた。出来上がつて「これでよし」と色紙を手にとって目の高さまで掲げて鑑賞する。そこで、はたと気がつく。前の方が何となく淋しい。そこで、題を書くスペースとしては少し狭いが、何とかバランスがとれるように「こひのうた」を書き入れた、と推理した。

その根拠をいくつか述べてみよう。普通の場合、書き出しの準備として筆へ含ませる墨の量はたつぷりと多い。この多い状態で「いざゆかむ」と一気に書いている。含墨の多い潤筆では「こひのうた」の「こ」のキリリと細い、錐画沙の書線は不可能だ。この線は、歌の最後まで書き進み、ほど良く調子が出たその延長上に表れたものと見て間違いはない。これに続く「ひのうた」のそれぞれの書きぶりも、決して「さあ、これから書くぞ」という白い紙に向かう時の緊張感のあるものではなく、やはり調子の出

た延長のかなりくだけた感じのものだ。

書き出しの緊張感は、むしろ「いざゆかむ」の「い」の第一筆目に見られる。少し細かい指摘になるが、起筆に入る直前の、有るか無いかのような命毛が紙面にかすかに触れた瞬間の、小さな小さな筆あとを見逃さないで欲しい。人は誰でも、よしんば相当に書き慣れた人でさえ、落筆の瞬間には少しく躊躇する気持ちがあるものだ。そんな気持ちの一つの表れとしてこの部分を見ることが出来るのではないだろうか、と思つた。

天国におられる「牧水さん」に「真相はいかがですか？」と尋ねたら何と答えてくれるだろうか。きつと「うん、実はそうなんだよ。君」と言つてくれるのではないかと思うのだが…。

こんなことを空想しながら鑑賞するのも、楽しい一つの方法ではないだろうか。

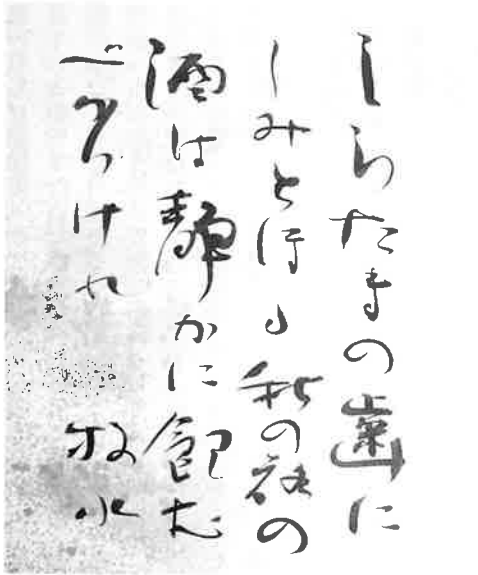
ところで、牧水の「かな」の書き方には、他の作品を見てもわかるように一種の特徴がある。それは、右回転の大きな動きである。このことから私は、正岡子規が仮名について論じたことを河東碧梧桐が記したという一文(山上次郎が『墨』第一号所収の「筆に靈あり―書の子規―」の文中に引用)を思い出す。それは、「仮名は全体が先づ直線よりも曲線で出来ると言つていい。曲線は成るべく疎大に成るべく大きく屈曲せしめるがいい。るといふ字でも末筆の半円を書く部分を軽く廻はさないで十分深く大計画に曲げるがいい。其他同じやうに、屈曲する処に力

を入れて、それを大まかに、馬鹿らしい程度にて大きく書くつもりであれば、多少重みのある字を出来すことが出来ると思ふ」というのである。

牧水が当時この論に直接触れたかどうかは知らないが、当時の子規の存在の大きさを考えると、まったく影響がなかったとは考えられないと思うがどうか。

もう一つ興味がそられるのは、短歌の師である尾上柴舟おのえさいしゅうの書と書きぶりがまったく違うということである。

尾上柴舟といえば、当時の仮名書道界における上代様（藤原行成などに代表される平安時代の和様の書法、特に仮名書法の典型的な美しさ）の書き手の第一人者である。『平安朝時代の草仮



名の研究』で文学博士になり、日展の大御所、芸術院会員にもなったほどの人である。一般的には当時の歌人達も、上代様の流れをくむ書きぶりをしていたのである。短歌の指導は受けても、書の影響は全く見られないということの不思議をどう理解すればよいのか。

もともと、牧水に限らず、子規や虚子、八いや光太郎、そして白秋、朔太郎、実篤など同時代の文人たちは、当時の書家達がこぞって稽古していた書道界の書とは無関係の書を書いていく。これらはむしろ、師風伝承の決まり切った型にはまった書きぶりに反発し、へ自分の文学（生きる哲学）をもって、明治という新しい時代を生きた人間の自由な精神の表れと見た方が正しいのかも知れない。そして、書というもの



が本来、こうした自由な精神を基礎としなければならぬのだという意味で、現代の書を学ぶ人たちにとっても、極めて示唆的なものではないだろうかと思われるのである。

また、牧水記念館で、初めて「しらたまの歯にしみとほる」の色紙を見た時、この雰囲気はどこかで見た感じだと思った。やがてそれが、藤原定家の小倉山荘百人一首の色紙であることに気がついた。まったくよく似ている。そういえば、以前、二女社で出した『文士の筆跡』の中で、書家の松井如流氏が定家と牧水の類似点を指摘していたのを思い出した。念のため当たってみると、第四巻「歌人篇」に「中世の歌人藤原定家の書は、肉太で個性的なものであつたが、牧水の書はいわば定家の現代版というべき

風をなす。定家にはどこか嫌味があるが、牧水にはそれが無い。いかにも朗々として、詩情にあふれている。」とある。この類似点について、古筆研究家で、東京国立博物館の美術課長も務めた大学の同期である古谷稔氏に話したところ、「自分もそう思っているので、その接点を探っているところだ」ということである。大悟法氏の説によると、牧水はとりわけ書についての勉強をした形跡はないようだとのことである。しかし、私は何の根拠もあるわけではないが、牧水が歌を勉強する段階で、

定家の有名な歌論書『近代秀歌』の写本あたりを見ていたのではないだろうか、と勝手に楽しい想像をしているのである。

昨年、市制八十周年の記念事業として第一回沼津文学祭が行われたが、そのテーマである「牧水、あらたな旅立ち」にちなみ、私の関係する書作展の中、次の三展には牧水の歌を書かせてもらった。

東京銀座・洋協アートホールでの第二十一回硯心会書展(東京学芸大学書道科同窓会展)、私が主宰する研心会の沼津・ギャラリーほさかでの第二十九回研心書展、沼津市民文化センターでの市芸術祭書道展である。前二展には、歌集『秋風の歌』からへこの歩み止めなばわれの寂寥の裂けて真赤き血や流るらむを、市展には、歌集『海の声』からへ石ころを蹴り蹴りありく秋の街落日黄なり酔醒めの眼にを書作した。

へこの歩み…の歌は、自然や酒を詠んだものが圧倒的に多い中で、めずらしく内面の強さを激しく吐露し、生きる姿勢を厳しく表面に押し出した歌と見た。

牧水にとって「この歩み」とは、旅を行く道程であり、歌を詠む行為そのものである。私にとつては、ただ一筋に歩いてきた「書の道」につながるものである。

自然や酒などといった、観念的な私の「牧水読み」を排して、今、牧水の歌の中では最も好きなこの歌を書いた。作品へのコメントには「歌

意を体しながらも、そのへ強さ」を内に秘めた表現…それを感じ取ってもらえれば幸いである」と加えた。

へ石ころを…の歌。牧水がこの歌を詠んだ時、どんな心境であったのだろうか。おとなが石ころを蹴りながら歩く…。かつて身に覚えのある自分の心境と同じだったのだろうか、と重ねてみる。

この歌を味わう時、生涯忘れることのない故郷津軽の秋の夕陽の風景が目に見え浮かぶ。何もかも代え難い我が心の美に対する原風景である。牧水の歌は、時に己の心にアイデンティティを自覚させてくれる不思議な力をもっている。その不思議な力が、書作への意欲を駆り立てるのではないだろうか。



【筆者プロフィール】

一九三八年生れ。本名眞。東京学芸大学書道科卒。高校書道教師として教壇に立ちつつ、漢字、かな、漢字かな交じり書、墨象作品等を発表し、書家として活動。元毎日展会員、奎星会同人。静岡県美術展寄託賞、静岡県教職員展最優秀賞、県教育奨励賞等を受賞。

文部科学省高校書道資料作成委員、静岡県高書研理事長などを歴任。書道研究「研心会」を主宰。

◆ 新刊紹介 ◆



伊豆や箱根等を牧水が旅をしたときの紀行文や短歌が「下田街道・裾野」「伊豆東海岸・箱根」「伊豆西海岸・沼津」の三部構成にまとめられている。

牧水の紀行文等に添えて、牧水にゆかりのある十五人の方々の牧水への思いが語られており、充実した読みものになっている。また、当時の珍しい写真が多数掲載されているのも楽しい。下田市生れの編者村山道宣氏の熱い思いが全編に買われている。監修は「若山牧水賞」の選者岡野弘彦氏、解説は須永秀生本会理事。木蓮社刊、定価二、四〇〇円。

牧水の詩歌の魅力を音楽で表現したCD「若山牧水歌の調べ」(木蓮社刊、定価二、四〇〇円)も発売されています。書籍、CDは、当館売店で取り扱います。

第十四回中学生短歌コンクール

情感あふれる中学生短歌

「中学生短歌コンクール」は、沼津牧水祭の一環として実施されており、市内の中学校の生徒から募集し、優秀作品を表彰している。今回寄せられた歌数は、一、三二九首に及んだ。

短歌は言うまでもなく日本古来の文学である。若い中学生がこの三十一音の短詩に心を寄せ、己の心に湧き立つ感動を詠み、叙することは大変意義のあることと思う。

応募された一、三〇〇余首には、それぞれの思いや抒情が躍々と綴られており、短歌という文化がこの若者たちによって次代へと継承されていく姿を作品から見た思いがした。

しかし、ともすれば自己中心的に流れ易い人間関係、また、物質的、即物的な考え方に陥りやすい社会構造、明日が見えない混沌とした世相の中に生きている現代の中学生である若者がどんなモチーフを持ち、どんな感動を抱いて、どんな風に歌うかという不安と疑念をもっていた。が、その思いとは裏腹に作品はみな健康的で明るい。その上、人間味あふれる抒情豊かな作品、そして希望と夢をうたい、逞しく生きようとする作品が多く見られたことは嬉しい収穫であった。選歌については、全体から五十首を

選びそれを入選とし、特に優れた作品を特選とした。

選には、沼津牧水会役員の青木朝子、川口和子、須永秀生、杉山重義、杉山芳春の五名が当った。

特選の作品を紹介する。

京都タワー窓から臨む町並みに古代と現代
仲良く映る
米山祐介(第五中)

ヨーロッパのある国では異なった宗教の聖地がそれぞれ共存、共栄していることを聞く。「古代と現代仲良く映る」には、それに似かよった作者の思いが込められているのかも知れない。京



の都の古さと新しさとの調和した風景が美しい。うれしそう私の姿ながめてる浴衣の着付けしてくれた祖母 杉本さやか(第二中)
一句の「うれしそう」から結句の「祖母」まで読者を引き付けた技法は巧みである。作者の祖母への親愛の情がほのぼのと伝わり心を和ませる。微笑む二人の顔が読む者の心の中にいつまでも消えずに残る。

見るだけで吸い込まれそうとろけそう弥勒菩薩の魅惑の笑顔 齋藤慎吾(第五中)
弥勒菩薩の笑顔を「魅惑の笑顔」ととらえて個性的な表現をしている。上句の「吸い込まれそうとろけそう」の具象と下句の抽象表現がほどよく噛みあつて、複雑な心の動きを手堅くまとめた。

夏休み部活でうまるスケジュール海もプールも入る場所なし 手塚亜純(浮島中)
中学生の夏休みは忙しい。「海もプールも入る場所なし」は、簡潔で的確な表現。憧れる気持ち、失望する溜息との心情を見事に表出している。省略の効いたリアルな表現が一首を生かした。

振りぬいたクラブの先へ飛んでいくボールの先には暗れわたる空 岸誠人(暁秀中)
「振りぬいた」「暗れわたる空」によって広々とした爽快なゴルフ場の風景が展開する。「クラブの先」「ボールの先」からは美しく描く白い球の拋物線が見えてくる。屈託のない歌いぶりが快いリズムを生んでいる。

ここちよくノートをめくる風が吹き私の心
空へと移す 栗原あかり (第四中)

生きもののように吹いてくる風に清々しさを
感じる。風、私、空との一体感が作品を大きく
している。「ノートをめくる風」が「私の心空へ
と移す」と広がりを見せる。そこには明るい未
来が展がる。

波の音一つ二つとかぞえては気付いてみた

中村尊郁 (原中)

漣が静かに寄せる夏の浜辺であろうか。海か
ら天へと視界をひろげスケールの大きい作品と
なった。「気付いてみたら」は、時間の経過を示
し、一首を味わいのある作にした。「満天の星」
には美しい夏の星座が煌く。

今は亡き祖母の寝ていた和室の畳ベッドの

あとが虚しく残る 後藤悠 (第三中)

率直に、純粹な思いで詠んでいるのがよい。
「ベッドのあと」は、この一首のキーワードとな
っている。作者は、今は亡き祖母の姿をその「ベ
ッドのあと」に重ね合わせて偲ぶ。ナイーブな
感性が限りなくむなし。

私ごと一つ一つの花々が顔を出しているアジ

サイの花 大津菜穂子 (大平中)

紫陽花は、ひとつひとつの小花が集まって鞠
のような形を成して咲く。その花々は、われが
われがと競うように顔を出しては開く。擬人法
での表現が現代の一面を窺わせるようで興味ぶ
かい。作者の繊細な感性が見える。(杉山芳春)

第八回若山牧水賞に 栗木京子氏の歌集『夏のうしろ』

宮崎県、延岡市、東郷町等が主催する第八回「若
山牧水賞」の受賞作品は、栗木京子氏の歌集『夏
のうしろ』(短歌研究社)に決り、二月五日(木)、
宮崎市の宮崎観光ホテルで授賞式が行われた。

授賞式では、東郷町立坪谷小学校児童による牧
水の歌斉唱、伊藤一彦、佐佐木幸綱両選考委員の
受賞者紹介と講評、選考委員岡野弘彦氏の「日本
の吟遊詩人若山牧水」と題する記念講演があった。
翌六日、栗木京子氏の受賞記念講演「牧水のう
しろ姿」が延岡市の野口記念館で催された。

栗木京子氏は、一九五四年名古屋生まれ。京都
大学理学部卒。在学中に短歌を始め、角川短歌賞
に入賞。初期の短歌「観覧車回れよ回れ想ひ出は
君には一日我には一生」で知られる。歌集に『水



惑星』『中庭』『綺羅』『万葉の月』、歌書に『短歌
を樂しむ』がある。岐阜市在住。「塔」選者。

『夏のうしろ』は、知的で鋭く、女性的な抒情性
をもちながら鋭い批評性に富んでいる歌集と評さ
れており、本年の「読売文学賞」も受賞した。

「若山牧水賞」受賞に際して栗木氏が自選した
十五首のうちから、次の八首を紹介する。

大雨の一夜は明けて試し刷りせしごと青き空
ひろがりぬ

風景に横縞あはく引かれるるときすすずしさ
秋がもう来る

さびしさに北限ありや六月のゆふべ歩けど歩
けど暮れず

竜胆の咲く朝の道この道を歩みつづける復員
兵あり

九月来て昼の畳に寝ころべばわがふとももの
息づきはじむ

この寺を出ようとおもふ 黄昏の京を訪へば
彌勒ささやく

国家といふ壁の中へとめり込みし釘の痛みぞ
拉致被害者還る

夏のうしろ、夕日のうしろ、悲しみのうしろ
にきつと天使あるらむ

なお、本会の林茂樹理事長が授賞式に出席し、
式後の祝賀会でお祝いのご挨拶を述べた。